

く何事も手作業であり、立ち木を切り唐くわで開墾し、夜遅くまで働き馬鈴薯や小麦、大豆等を作り生活をしました。二年ほどしてから陸稲も作り、親子家族も全員揃いどうにか生活も出来るようになり、二十八年、私も結婚しました。その頃より水田もでき酪農にと経営も安定してきました。私は子供にも恵まれ父母も健康で妹と弟も就職し、何事もなく何年か過ぎ去り、兄弟も結婚し父母も高齢となり、酪農も設備投資が多くなり友達の勧めで水道設備工事に転職をし、今は父母も亡くなり長女に養子を迎え、設備業も養子に譲り従業員もおり忙しい毎日を過ごしているこの頃です。私も子供と孫達に囲まれ五十年前の苦労も忘れがちである。

しかし、私も七十五歳となりました。常日頃より脳裏にいつもあった、シベリアで亡くなった同胞と終戦時満州で亡くなった姉や姪と甥の墓参をと考えていたやさき、平成四年七月、全国抑留者協会のシベリア慰霊訪問団に参加し、平成十一年七月、中国慰霊訪問団にも参加し同胞の墓参も済ませ気持ちの整理もできま

した。いまは国内、国外と観光旅行の日々を過ごしている今日この頃であります。今後はボランティア活動に専念し、社会の皆さんの一助になればと思ひ、残りの少ない人生を有意義に過ごしたいと念願いたしております。

## 抑留者

栃木県 青木 久

一、出生から入隊

① 出生から卒業後の生活状況

父辰三が皇宮警備官であったので、東京都荒川区町屋で大正十三（一九二四）年二月一日生まれ、その後、父が栃木県警察官に転職で、昭和二（一九二七）年、宇都宮市大寛町に移転。更に同四年、塩谷郡北高根沢村に移転。

五年四月、隣接、熱田（にいた）村、文挾尋常小学校に入学。小学校五年生の時、母イチの実家の那

須郡上江川村で、跡取りの弟網隆、妻ソノの長女静香（大正十四年十月二十日生）が十月九日死亡で、次女雄子五歳の子守りと遊び相手を兼ねて網家へ連れて行かれ、上江川村第二尋常小学校へ転校。

高等科は、昭和十一年四月、十二歳、隣町塩谷郡喜連川町尋常高等小学校へ入学。約四キロの山路を徒歩で通学でした。

昭和十三年四月、十四歳、栃木師範学校一部一年に入学（旧制中学校卒業生は二部一年生）。当時は、市内の者でも全員寄宿舎生活。

後年、学制改革で、一部三年生までは予科生、一部四年以上と二部一年以上は本科生とし、本科生は一部、二部出身者を混成で学級編成をされました。

更に昭和十八年四月、官立専門学校に昇格で、私達は最初の本科三年生に昇級。当時は大陸科も新設され、卒業生は満州の学校へ派遣されました。

昭和十八年まで全国の師範卒業生は、大切な第二国民を養成するからといわゆる兵役制度は免除され、三月に卒業すると四月から八月末まで最寄りの

軍隊に短期現役兵として入営し、除隊の時に陸軍伍長の階級章を戴いたので、「短現伍長が兵隊ならば、蝶やトンボも鳥のうち」とか「電信柱に花が咲く」などと、うらやましがられました。

そして九月の二学期から、各学校へ赴任してゆきました。

ところが当時、第二次大戦は無謀なる軍部の戦域拡大でとどまるところなき泥沼に陥り、兵士の不足から、それまで学生には卒業まで徴兵延期制度がありました。それが廃止となり、いわゆる学徒動員令が発令され、この悪令は師範生にも適用されました。

即ち昭和十八年八月、私達が本科三年の時、八つ上がりの同期生ほとんどに召集令状が届き、学校ではやむを得ず八月二十五日繰り上げ卒業式を行ない、九月から十月にかけて、南方へ、北へと出征されました。

七つ上がりの私はか教人が、九月の二学期より、足尾や栗山など山村僻地の学校へ赴任。私は、当時、県庁内教育課におった義理の叔父のはからいで

宇都宮市内の内示を受けましたが、三依村（現・藤

原町）国民学校を希望して着任。高等科一年生を担

任しました。当時の校長は檜山胤雄先生、教頭は斉

藤邦平先生、青年学校軍事教官は阿久津満氏でし

た。下宿先は、弘法大師で有名な独鈷清水のある大

字独鈷沢（とっこざわ）の旅館で、大事にされ、楽

しい生活でした。

② 家業、家族構成など（昭和十八年秋）

父 辰三 五十一歳（明治二十五年十一月二十三

日生まれ）

大蔵省管轄 専売局 高根沢取扱所勤務

母 イチ 四十八歳（明治二十八年九月三十日生

まれ）

職業 産婆（現・助産婦）

貧乏家庭には無料奉仕で、医者の手又、産婆

の青木と、もてはやされた。

兄弟姉妹八人（私は長男）。

にぎやかな家族構成で、次女芳枝は亡くなりまし

たが（平成元年十一月十六日）、他の七人は現在も

元気に暮らしています。

二、ソ連軍侵攻前

① 入隊までの経緯

昭和十九年春、徴兵検査で、小柄な私は第二乙種

（甲種合格、第一乙種、第二乙種、丙種、疾病患者

―兵役免除の五段階）でした。

それでも十九年十一月、私にも赤紙の召集令状

で、児童生徒や教職員、父兄会、住民達に見送ら

れ、十一月二十日、東部三六部隊（旧五九連隊）に

入営しました。

翌日は三種混合の予防注射を受け、一週間目に北

支派遣軍・陣第四二八六部隊、独歩第二五大隊に転

属命令。

十一月二十七日、営門から軍道（現・桜通り）を

行進、市街地から宇都宮駅前広場に着くと、大勢見

送り人の中に父と陸軍戸山学校同窓生で師範の軍事

教官であった小池先生がおられ、二人はそっと私に

近づき「師範卒の教員まで召集するようでは日本は

負ける。無駄死にするなよ……」にビックリ。

汽車の窓から手を振り別れ、終戦まで信じませんでした。やがて二十年八月、満州で終戦を知らされたとき、その先見の明に脱帽でした。

軍用列車は、日本国内を通り、博多から釜山、満州を経て北支北京を通過し、中国北東部の涿<sup>タク</sup>県<sup>ケン</sup>へ十九年十二月三日到着しました。

三カ月間、軍事訓練。一期検閲の後、旧制中学卒以上は幹部候補生の試験を受験。受けざるは国賊扱いの時代。

二十年四月一日付、甲種幹部候補生に合格、二階級特進で上等兵。

五月一日兵長で、豊台の旅団本部で集合教育。終了後、北支には士官学校がないので、六月一日付伍長で満州へ移動（乙種合格者は北支に残留）。

七月一日、牡丹江省石頭にあった陸軍予備士官学校へ、最後になった第十三期甲種幹部候補生として入校、軍曹に進む。

## ② 装備（兵器・軍服等）の状況

東部三六部隊から北支へ行くときの軍服は新品の一装用でした。兵器の鉄砲は、日露戦争（明治三十七〜三十八年）以来の三八式歩兵銃で、弾丸は五発しか出ない旧式なもの。それも十人に一人の割合で渡され、後は現地へ行ったら貰えの有様でした。

特に満州では、戦況の急迫に対応して根こそぎ動員という形で部隊が編成されたと言われているが、隊員の構成、装備などの状況は、石頭の予備士官校は六中隊編成で、一中隊から四中隊までは一般歩兵中隊、五〜六中隊は特科生で、重機関銃、戦車、砲兵中隊でした。

各中隊は八区隊編成で、一区隊八〇人×八区隊六四〇人、一個中隊。六四〇人×六中隊三三八四〇人が全生徒の人数だったと思います。私は、二中隊七区隊所属でした。学校での装備は、一般部隊と同様でした。

## 三、ソ連軍侵攻

八月十日朝、全員校庭に集合で、昨八月九日ソ連

軍が侵攻、と伝達を受けた。

学校では、一々三奇数中隊と五々六特科中隊の半数は北へ、二々四偶数中隊と五々六特科中隊の残り半数は南への命令でした。

十日夜北へ向かって出発した部隊は、十三日、磨刀石付近でソ連の主力部隊（重戦車、百連発の自動小銃）と遭遇し、七二人が戦死。

岸壁の母、端野イセさんの息子、新二候補生は、北組で重傷死亡の説と、現地人に助けられ満州娘と結婚し生存の説……。

十一日南へ向かった部隊は、一文字山で蝸壺を掘りソ連軍を待ったが見えず、翌日東京城を通過して南下。

部隊の中には、学校での匍匐演習で私のように怪我をして診療所にいた人、病気で保健室にいた人達もおり、強行軍についていけず、次第に落伍した人も十人ほどおりました。

#### 四、終戦

終戦も知らず、山道を南下の旅路。八月二十日鏡泊湖畔にたどり着き、そこにいた部隊より八月十五日に終戦と聞いてビックリでした。

そして思い出したのは、出征時、父と小池教官の日本は負ける、無駄死にするなよの言葉で、心から感服しました。

鏡泊湖畔にいた部隊は武装解除も済んでおり、私達たどり着いた十人ほどは、その部隊長金口大尉に、小銃・帯剣等を引き継ぎました。現地解散はそこにいた金口大尉も私達もありませんでした。

その後、牡丹江へ集合するよう言われて、行動を開始。

当時ソ連兵が一番欲しかったのは腕時計と万年筆、将校のトランクで、腕時計だけでも単純計算六十万個が無料でソ連に輸入されました。

#### 五、シベリア抑留地への旅

鏡泊湖畔で、武装解除は日本部隊が実施して、ソ連軍に引渡し。その後、牡丹江へ向かって東京城、

石頭と逆戻り、畑のトウモロコシや赤大根を生でかじりながら行進し、掖河へ到着。食糧は満州大豆が主食でした。

東京ダモイとだまされて上下二段の有蓋貨車に積み込まれ、家畜並みの扱いで長途シベリアに送られた。九月から十一月にかけて牡丹江駅から毎日貨車で日本兵が運ばれ、ソ連兵の誰に聞いても東京ダモイ。まさかシベリア行きとは思わなかった。

貨車内の食事は黒パン一枚、日本へ帰れると思っていたから皆元気で話し合っていました。

十一月二十八日牡丹江駅から乗車、ハバロフスクを北上し、十二月三日イズベストコーワヤ地区（第四地区と言われた）三支部三〇八分所へ到着。正しくは、内務人民委員部管轄、一般矯正（強制）労働収容所へ捕虜として。

当時は冬將軍、零下四〇度を越す日もあり、聞きしに勝るシベリアの冬、年配者や都会育ちの兵士は衰弱してゆきました。

## 六、抑留地の生活

三〇八収容所での主な作業は燃料の森林伐採。隣のベッドにいた召集二等兵が衰弱し、先がないと思っただので、この世の名残にせて腹いっぱいにと炊事係に訳を話し、飯盒に食物を頂き、皆が作業に出た後食べるようにと、出かけました。ところが、この日、ソ連軍による私物検査が行われ、食物の入った飯盒が問題にされ、炊事から盗んできたのはベッドに休んでいた召集兵と断定され、今夜は夕食抜きで一晩独房と言われた。

夕方、作業から帰り、これを聞いてビックリ、そんな罪を受けたら今夜にも死亡の危険？ 炊事から頂いたとは言えないし、盗んできたのは私ですと名乗り出、営門協の独房へ。ところが営兵所当番のソ連兵が親切で、班長のお前がそんなことをするはずがないと、夜は営兵所で一緒に夜明かし。

翌日三十人ほどが十キロほど離れた三一〇収容所へ転属で、私もその中に入れられ出発、雪道の中を歩き出す。昨夜一睡もせず、夕食、朝食抜きの私は

三二〇へ着いた途端に倒れ、三〇七病人収容所へトラックで移送されました。

十日ほどで良くなると三〇三収容所へ移転。ここは戦犯収容所で、日本の陸軍将校達。私はソ連軍将兵の官舎当番。(二十一年四月〜八月)

四カ月ほど過ぎると、将校達はどこかへ移動され、私は四支部に近い三一九分所へ移転されました。

三一九収容所は鉄道建設工事で、二十二年三月、トラックより材木をおろしていた時、くずれ落ちた材木とともに土手下にころんで、病室へ運ばれ静養。(二十一年九月〜二十二年三月)

一週間ほどで良くなると、今度は収容所の装飾係。ロングハウスの室内、白壁に絵をかく仕事で、スターリンの肖像画を初め、富士山、鯉のぼり、タンポポやブドウの連続模様などを描いて大好評でした。(二十二年四月〜八月)

昭和二十二年八月、第四地区の地区本部があった一支部二二一分所で第一回地区講習会が開催され、

各収容所から一人ずつ出席の命令で、三一九分所では私が指名されて参加。二十日間共産主義などの講習を受けました。同年九月にはハバロフスクで中央政治学校が設立され、各地区より二人が派遣で、その中の一人に選ばれて受講。講義はマルクス・エンゲルスの弁証法的唯物史観や経済法則、日本の農村問題、労働運動史等でした。

十月に戻ると、四地区講師団員の一人に加えられました。

二十三年十月夜、トイレの帰り、脳血圧で倒れ、二支部テルマ病院に運ばれる。十一月、入院者、病弱者復員で、ナホトカ港より舞鶴へ無事に復員できました。(二十三年十一月二十七日)

兵役時代からいつも清潔に気をつけ、休みには衣服類の洗濯。入浴は入ソ当時はないので、ドラム缶で湯を沸かし、バケツ一杯分で体を洗っていました。

身体検査は入ソ後一年くらいたってからで、私は軽労働の診断を受けていました。丈夫で健康な人は

重労働。

ソ連抑留者は六十万人と伝えられ、私が歩いた収容所は百人くらいの収容所でした。

## 七、労役

労役の時間は八時間以内、仕事量（ノルマ）はなかった。薪割りだけは、高さ一メートルの棒が一メートル間隔に立てられてあり、その中へ積み重ねていた。

三一九収容所では、日本軍の県大尉が、ノルマの報告で、今日はA君とB君を一〇〇%、後の者は六〇%前後、明日はC君とD君を一〇〇%……と、上手にソ連側に報告していた。

三一九分所で夕方、ソ連の作業係中尉が、その日能率の悪かった小隊に薪を取ってこいと正門から出そうとした。守衛所の少尉は開門を拒否。時間外であり、日本人も嫌がると押し問答。中尉は階級章を盾に、無理矢理自分で門をあげ、ダバイ ヴェストレ（早くやれ）と日本兵に命令。途端に少尉は拳銃

で中尉に一発、続いて自分のこめかみに……。

たとえ相手が上官でも職務上一步も譲らぬ行為に心より感服。上にはベコベコの日本軍とは雲泥の差でした。

## 八、抑留者の統制管理

労役に就くか否か、どの労役に就くかは収容所により作業内容も異なったが、基準も別になかったと思う。

労役に堪えられない者は、収容所内の清掃係等、軽作業に従事。

健康管理は自分が行ない、医師による健康診断管理は入ソ後一年以上過ぎてから。

入ソ時、日本軍は二列横隊、小隊長、中隊長は列外。これでは数えがむずかしいと、全員入って五列に。これなら、五、十、と数えやすいからと。

月日がたつうち、日本軍任せの朝夕点呼でした。作業場への往復はソ連兵士が案内役で、別に異変はありませんでした。

着衣等衣服類について、春夏は日本の軍隊服、秋

冬はロシアの防寒具を着用していました（帽子も）。

食事は、旧軍隊と同様、炊事場が設けられ、一日  
三回、内容も軍隊と同じようでした。よく覚えてい  
ないが、肉は羊、魚はなし、野菜は畑に作られて

あった。樹木の実や松の実も食べたし、中には毒キ  
ノコを間違つて食べ、亡くなった人もおりました。

休日はソ連兵が休むので、日本兵も休み。洗濯を  
したり、入浴し、ヒゲを剃ってもらつたり。五月一  
日のメーデー休日も教えられた。

コムソモリストでは日本兵演劇コンクールが行わ  
れ、四地区審査員として出席、同姓の青木光一氏を  
知つたのもこの当時。

収容所の建物はロングハウス。窓は二重、内外と  
も赤土で壁、その上を石灰で塗り白い色。暖炉はベ  
チカ。起居、動作、居住密度も平常でした。

洗脳教育（民主化教育）は、先に述べたように、  
地区講習会が二十日間、ハバロフスク本部講習会が  
一カ月。当時合言葉は、赤大根になろうよで、外は

赤いが中身は白い……。

入ソ当時は兵卒、下士官、将校と階級制度でした  
が、民主化運動により階級制は廃止され、選挙制度  
になりました。

## 九、帰還

体調不良で二支部テルマ病院二一〇分所に入院中  
の昭和二十三年十一月十二日、この年最後の復員発  
表で指名を受けました（入院患者は、役に立たない  
と）。

十一月十三日、テルマ出発、シベリア鉄道支線で  
イズベストコワヤを経由、十八日ナホトカ港に到  
着しました。

ナホトカには民主グループアクチーブ（活動家）  
と称する人達があり、残留するよう呼びかけられた  
が、十一月二十三日、大郁丸に乗船できました。

皆、帰国できる喜びで平穩、二十五日早朝、日本  
列島が見えると大声で喜んでいました。

昭和二十三年十一月二十五日舞鶴港へ上陸。復員

に関する手続一切は二十七日に完了しました。

## 十、帰国後の生活

復員後、二十四年一月から教職復帰の準備中、宇都宮市県庁内の進駐軍より呼び出しで、君は三年余月もロシア生活で、教師になると児童生徒が赤化されるので復職は認めない……。で、知人のいた日本専売公社宇都宮地方局に就職し、定年退職（当時は五十八歳）の昭和五十七年三月まで、三十三年間勤務しました。

平成四年九月十日～二十日、極東シベリア墓参団十二人に参加し、ハバロフスク、コムソモリスク、イズベストコーワヤまで、十泊十一日、墓参の旅を続けました。

生活も順調で、紆余曲折もありませんでした。

## 【執筆者の紹介】

青木さんは高根沢町で剣道教室を開き、子供たちに剣道を指導し始めて二十五年。教え子は約千人を教

え、初期の教え子が、今では教室の指導に当たり、立派な後継者に育っている。

昭和五十年当時、町内の父兄たちから「天候に左右されない室内でできるスポーツを子供たちに教えてやってほしい」との強い要望を受けてこの教室を始めた。

青木さんは昭和十三年四月に栃木師範学校一部に入學。当時は旧制中学以上の正課に武道（柔道、剣道、女子はなぎなた）の授業があったが、「私は体が小さかったから、剣道を選んだんですよ」と、ゆっくりした口調で剣道との出会いを語る。

小柄な体を精いっぱい動かし、一年じゅう練習に明け暮れ、剣道の腕はめきめきと上達した。昭和十八年九月には藤原町の三依国民学校で教職に就き、すべてが順風満帆だった。

ところが、昭和十九年十一月召集令状により出征することとなった。終戦時は満州（現在の中国東北部）の予備士官学校にいて、シベリアに抑留された。氷点下四十度を下回る寒さの中、森林伐採や鉄道工事など

の重労働を強いられ、食料事情の悪さから次々と仲間たちが倒れていき、六万人余りの尊い命が消えていった。

「私は幸いにも三年三カ月後、無事に復員できました。これも剣道で鍛えた精神と体のおかげだと思っています。」

終戦後は、県内の各剣道連盟の発足に奔走する一方、様々な剣道大会で優勝に輝いた。また、文武両道にも心がけ、衛生管理者や文部省検定試験・高等学校教諭体育科剣道に合格したほか、地域社会での貢献活動などが認められ、数々の感謝状を受けた。

昭和六十一年と六十三年には、日台湾交流親善剣道使節団員に指名され、台中、台北でけいこ会や親善試合に参加し、国際交流にも一役買った。さらに、昭和天皇御践祚五十年、御喜寿、御在位六十年奉祝武道大会に、指名を受けて模範試合と審判を行った。

今後は将来の剣道を担う後継者を育成し、地域のリーダーとして地域社会に貢献したいという。

（栃木県 野沢 芳夫）

## 抑留記

栃木県 野沢 芳夫

「ヤポンスキーダモイ、ビストラー、ビストラ」ソ連兵の言葉を信じ貨車で運ばれた先は、何と地獄のような酷寒の地だった。昭和二十（一九四五）年八月のソ連の対日参戦に遭遇し、敗戦後捕虜としてシベリアで抑留生活を送った。その過酷な体験を、当時の記憶を頼りに記したものである。

少年の凶悪犯罪などが多発する今こそ、命の重みや人が助け合う心を考えてほしい。

昭和二十年八月、ソ連軍侵攻による出動下令のあったのは八日の深夜、正確には八月九日午前一時過ぎ、小雨の降る夜であった。完全武装で校庭から一文字山へ、肉攻班の配置のため陣地構築、東京城、鏡泊湖へと、めまぐるしい作戦行動は生死を超越した当時の我々の姿であった。峭壺に入り、敵戦車に黄色火薬を